

## 2つの生産量日本一～ぼうふう&木の芽

木曽呂を含む神根地区は市内で農家が最も多い地域ですが、中でもぼうふう(防風)と木の芽の生産量は全国有数です。

ぼうふうはセリ科の多年草で、苦みと芳香、シャキッとした食感が特徴です。刺身のつまや、根は漢方薬にも使われます。地域でまとまって生産しているのは、日本中探しても、ここ神根地区だけと言われています。最盛期は毎年3月～6月で、収穫されたぼうふうは5本1組にして、まごも(水辺に生えるイネ科の植物)で結んで出荷します。このやり方は江戸時代から変わっていません。

木の芽はさんじょうの新芽で、独特の香りが料理を引き立てます。収穫作業は朝早くから行われ、ビニールハウスで栽培されたさんじょうの新芽をピンセットで摘み取ります。

収穫された作物は東京の市場から全国各地に届けられ、料理に彩りと深みを与える存在として活躍しています。

## 川口発、全国へ高級食材の生産地



## 川口市周辺 アクセス図



## 川口市経済部産業振興課

〒332-8601 川口青木2-1-1

電話: 048-259-9018 FAX: 048-258-1161

2022.11



# 差間・木曽呂コース

## 都内至近でネイチャーワークス お弁当持って出かけよう

JR武藏野線または埼玉高速鉄道(SR)の東川口駅がスタート。住宅地ながら緑も多く残る一帯を歩きます。雑木林の差間中公園通り、東沼神社へ。神社の裏手はすぐ見沼代用水東縁が流れていて、少し歩くと、昆虫や魚、鳥たちに親しめる川口自然公園があります。広い園内を散策したら、きれいに整備された木洩れ日の道をたどって木曽呂の富士塚へ。木曽呂地区の南側にはぼうふう農家が集中しています。こう門式運河の見沼通船堀を見て先人の知恵にうなづかされ、田畠が広がる見沼の景色に心奪われる。都市生活のストレス発散にうつてつけのコースです。

### B-4 東川口駅

JR武藏野線と埼玉高速鉄道(SR)が交差する、川口北部の基幹駅。周辺の市街化で利用客が急増しています。駅前には、トンネル掘削機を模したSR開通記念オブジェや吊り下げ式のフラワースタンド、ログハウス風のトレンディ、ユニークな設備が並びます。



### A-3 東沼神社

天正元年(1573年)より前に浅間神社として創建したと伝えられています。明治40年(1907年)、近隣社を合祀。見沼代用水東縁沿いの高台に置かれたことから、東沼神社と改称しました。学問の神・菅原道真がまつられていて、合格祈願の絵馬が多く見られます。



### B-3 見沼代用水東縁

利根川から水を引き、県東部・南部を潤す関東平野最大の農業用水。約300年前の享保12年(1727年)に完成しました。行田市から都内に至り、水路延長は84キロに及びます。平成3年(1991年)には用水沿いに遊歩道「緑のヘルシーロード」が設置されました。



### B-2 木曽呂の富士塚

富士塚とは、いわば“ミニチュア富士山”で、誰でも富士登山ができるようにと築かれました。高さ5.4メートル、直径20メートルで、寛政12年(1800年)に造られ、埼玉県内で最古の富士塚。当時の庶民信仰の様相を示すものとして貴重です。国の重要有形民俗文化財。



## ため池から用水路へ～見沼の変貌

### 巨大ため池の誕生

川口市からさいたま市に広がる広大な湿地・見沼を造り替えた最初の人物は、江戸初期の関東郡代・伊奈忠治です。忠治は、見沼の横幅がいちばん狭くなっている木曽呂の山口橋から対岸の附島(現在のさいたま市)にかけて、880メートルの八丁堤を作って沼地をせき止め、溜井(ため池)を作りました。これが見沼溜井です。

総面積1,200ヘクタールの大規模な溜井は近隣の田畠を潤しました。しかし、水深1メートルと浅いため、上流では大雨の洪水がひんぱんに起り、下流では日照による水不足に悩まされるという新たな問題が起きました。

### 農業用水と水運の確立

それから約100年後の徳川18代・吉宗のころ、「享保の改革」により、溜井は干拓され、巨大な水田地帯に生まれ変わりました。工事を担当したのは幕府の普請奉行・井沢弥惣兵衛為永。溜井をせき止めていた八丁堤を崩して下流に水を流し、新たに溜井の代わりになる用水を利根川から引いて、見沼の周囲の西縁・東縁に流しました。見沼の代わりになる用水という意味で「見沼代用水」と名付けられました。為永は全長60キロにわたる大工事を、農閑期の6か月間

### さしま B-3 差間ふれあいの道

北原台公園から武藏野線を渡り、東沼神社に至る遊歩道。車やバイクの通行を制限していて、歩行者にやさしい道になっています。落ち着いた石畳とカラフルなブロックで舗装され、ところどころに置かれたベンチは、道行く人の憩いの場となっています。



### B-3 川口自然公園

のどかな見沼田んぼの一角にあり、湿地の自然を生かした公園です。「チョウの楽園」づくりなど、自然環境の保全に力を注いでいて、カブトムシやクロガタが見られます。芝生のきれいな自由広場はお弁当を食べるのにピッタリです。



### こも　び B-2 木洩れ日の道

平成5年(1993年)1月に完成した約470メートルの歩道。石畳などで整備され、所々にしゃれた街灯やベンチが配置されています。道と平行に水が流れ、対岸の竹林からは日差しがこぼれます。初夏には見事なアジサイが咲き、訪れる人の目を楽しませてくれます。



### み　ぬまつうせんぱり B-1 見沼通船堀

享保16年(1731年)に造られた、東西の見沼代用水と芝川を結ぶ、日本でもかなり古い門式運河です。見沼代用水と芝川の水位差が約3メートルもあることから、2つの閘(水門)で水位を調節しながら船を通せる方式が考え出されました。

完成はバナマ運河よりも183年も前のこと。利根川流域と江戸をつなぐ舟運として、昭和6年(1931年)まで利用されました。



という超スピードで完成させました。為永はまた、東西の見沼代用水と芝川を結ぶ見沼通船堀も開削。舟運が発達するきっかけを作りました。

利根川流域からは年貢米や麦・野菜が運ばれ、江戸からは肥料や塩・魚類が輸送されました。

### かけがえのない水源

水をたたえ、人びとの生命線となってきた見沼。そこには竜神が住んでいるといわれ、言い伝えも数多く残されています。干拓が行われた後、見沼に住めなくなった竜神は千葉の印旛沼に移ったとの伝説が残っています。

現在は一部が整備され川口自然公園となり、市民のいこいの場になっていますが、田んぼは今も遊水地の機能を残す農業地として存在しています。東京近郊で失われゆく緑が保たれている、貴重な場所といつてもいいでしょう。



見沼田んぼの面影を残す  
川口自然公園

どこまでも緑  
武蔵の自然に誘われて

# 差間・木曽呂 コース



川口市マスコット「きゅばらん」

## 川口市内観光 ルートマップ



B-3 自由広場(川口自然公園)



**所要77分 全長6.1km**

先人のたくみな治水技術を追いかけつゝ、自然との共生を実感できます。



どこまでも縁、  
武蔵の自然に  
誘われて

No. 7

